

「思いやり」で「ぐんぐん」すすむ世の中に

一宮市立向山小学校四年

中川 みなみ

「福祉って何だろうか」

私は、こう思うしゅん間が何度もある。電車やバスで席をゆずることなのだろうか。いやいや、席をゆずるのは当たり前のことだ。母に教わった。でも、それでは福祉の役目が分からない。

昨年、私の大好きなおばあちゃんが、脳こうそくになった。私は信じられなかった。あんなに元気だったおばあちゃんが、右手、右足が自由になるなんて。おばあちゃんは、病気になることに対してショックを受けていた。その通りだ。私も自分が不自由になったら、ショックを受けると思う。

このような、全く予想をしていないことが、いつ、私におそいかかってくるか分からない。もしかしたら、明日かも知れない。

でも、そういう時のために「リハビリ」がある。おばあちゃんも半年間利用した。そして、もしも体の回復が望めない時のために、いろいろな工夫がある。

例えば、字が見えなかつたら「点字」がある。そして、耳が聞こえなかつたら、「手話」や「音声ガイド」がある。他にも、車いすに乗っている人のために、「身しよ者用トイレ」もある。

このように、体が不自由になっても、だれかが考えてくれた、多くの

しせつやプログラム、器具がある。

このようなものは、だれかを助ける支えになる。これらは、だれかの思いやりから生まれたのだろう。

「思いやり」

これこそが福祉なのではないか、そう思った。

こう考えると、電車やバスで席をゆずるのも「思いやり」だから、福祉なのではないかとあらためて思い直した。

「困っている人を助けること、人を思いやることが当たり前に行えること」と

それには、みんなが「福祉」を理かいし、だれかのために「思いやり」のある行動ができる、そんな世の中になればいいと思う。

そうすれば、しよ害者の人たちだけでなく、私たちも、安心してくらせるのではないだろうか。

そして、私は小さな「思いやり」をつづけ、みんながかいてきにくらせる町を福祉で作っていききたいと思う。

